ポスト植民地における女性の身体

東南アジアの女性器切除から考える

The Female Body in Post-colonies: Case Studies of Female Genital Cutting in Southeast Asia

一般にはあまり知られていないが、東南アジアのムスリム共同体では女性器切除が高い割合で実践されている。2015年以来、マレーシア、ベトナム、カンボジア、タイの各地で女性器切除の実態とその医療化について現地調査をおこなってきた3名の研究者が、その実態や人々の受けとめについて報告するとともに、東南アジアにおけるジェンダー、宗教、国民形成、グローバル化、公衆衛生と医療などのからみあいから女性器切除問題を議論する。

井口由布（立命館アジア太平洋大学教授）

“The Global Discourse of Female Genital Mutilation and Unrecognized Local Practices: State Medicine, Culture, and the Female Body”

アブドゥル・ラシド（RCSI & UCDマレーシア教授）

“FGC in South East Asia…will it ever cease?”

シティ・ヌル・アフィカ（マレーシア科学大学）

“How important is religion as the motivating factor in Female Genital Cutting (FGC) practice among the Cham immigrants in Malaysia?”

2024年2月10日（土）14:00～16:00

東京外国語大学海外事情研究所

183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1 東京外国語大学 研究講義棟427号室

＊無料

＊使用言語：英語＋適宜日本語による解説

＊参加申込・お問い合わせ：小田原（東京外国語大学） rodawara@tufs.ac.jp

＊主催：科研（基盤B）ポスト植民地における女性の身体—東南アジアとアフリカの「女性器切除」（代表者　井口由布）＋東京外国語大学海外事情研究所